社會科學選書

現代の経済学史

出口勇蔵著

社会科学選書 59

現代の経済学史

出口勇蔵著

《著者紹介》

出口勇蔵（でぐち　ゆうぞう）

1909年，京都市に生まれる
京都大学経済学部卒業後，同大学講師・助教授をへて
現　在，京都大学経済学部教授，経済思想史・経済学史専攻，経済学博士
著　書，『経済学と歴史意識』弘文堂（1943），改版はミネルヴァ書房（1968）
『ウェーバーの経済学方法論』ミネルヴァ書房（1966）
『社会思想史』（『経済学全集』2）筑摩書房（1967）
現住所，京都府宇治市木幡大瀬戸11

現代の経済学史

昭和43年7月10日　第1刷発行

定価 530円

著　者　出口勇蔵
発行者　杉田信夫
印刷者　中村勝治

発行所　株式会社 ミネルヴァ書房
京都市東山区山科日ノ岡堤谷町1
電話 075（581）5191—3番
振替口座・京都8076番

© 出口勇蔵，1968.

中村印刷・高橋製本

はしがき

この書物には旧稿を四つおさめた。

経済学史の研究が異常なといってよいほど盛んにおこなわれているわが国では、この部門の研究の方法論にたいする関心も深い。経済学史学会では、その方法論を共通論題として取り上げたり、そのテーマについてのシンポジゥムを開いたりしている。この書物の第一論文は、今から五年まえに開かれた、そのシンポジゥムでのわたくしの発言の内容を系統だてて述べると同時に、主として日本の同学の士の意見との異同について、私見を率直にのべてみたものである。昭和三十九年の『経済論叢』に三号にわたって載せられた。学会での報告で意図したところを公表して、学会の会員のみならず、ひろくわが国の経済学者の批判を請うことは、学会員としての責務であると考え、またことによっては、わが国の社会科学の基礎理論を追究している人たちにも批判の資料を提供することにもなるだろうと思って、ここに収めることにした。収録するにあたって少し加筆してみたけれども、

もとより不十分である。不十分であるというのは、私見の積極的な展開においてもいえるし、また最後にそえた、諸家の見解についての評言についてもいえる。ここに挙げた人たちの考えのほかにも、日本の経済学史家の見解でかえりみねばならぬものが二つ三つはある。また、わたくしがこの稿でふれたあとでまた見解を発表されている方もある。それらにたいしても、私見をしたためることは、わたくしの任務でなくてはならぬ。しかしながら、『経済論叢』に発表したことのために、わたくしの見解が必らずしも多くの人たちの清鑑をあおぐに至っていないようでもあるので、学界への責務をおおよそ元のかたちでここに発表し、補うべきところはつぎの機会にはたすことを公約しておきたいと思う。

第四の論文は第一論文の内容を平易に書いたものであり、初学者むきにという、『経済論叢』の編集委員の要求にこたえて成った小論である。発表は昭和三〇年四月。そういうものとして受けとっていただきたい。なお、ここでは表題を少しかえてある。

第二論文は『思想』の第三四三号（昭和二八年一月）に載った論稿である。ここで見とおしておきたかったのは、経済学史という、経済学の研究の一分野では、本質的に特殊な型の歴史的認識がみのるということである。いわゆる歴史学の立場から経済学史や経済思想

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

史について考えるのではなくて、経済学の立場で経済学史を省みるということが、必然的にもたらす制約について考えてみたのである。経済学史を科学史の一部門だと規定して考えてみようとする人もあるようだが、こんな規定は形式的に自明であって、経済学に固有な性格が明らかにされぬかぎりは、そこからあまりふかい意義は取りだせないであろう。むしろ社会科学の歴史研究というものの特殊性を自覚して、そこから経済学史を考えることが重要であると、わたくしは思っている。この小論の後の部分にはそうとう手を入れておいた。

第三論文はいちばん古く書かれた論稿であって、以前に拙著の中に収録したこともある。この小論は、方法論史の課題と考えているものがあらましのべられていると思えるから、また、その課題の内容を日本ではあまり論じられぬディーツェルについて例証しているので、現代の読者にたいしてもまだ価値をうしなっていないと思えるから、あえてここに置いてみた。最初に発表されたのは『経済論叢』の第五九巻第二、三、四合併号（昭和一九年一〇月号）であった。

わたくしは経済学史の方法論を手がかりにして、社会科学の学問的性質を考究している。

そして近いうちに考えをまとめて、世に問おうと考えている。ねがわくば、そのための部分的な私見の表示でもある本書の論稿にたいしてきびしい批判をたまわって、わたくしに反省の材料を与えてくださらんことを。

この書物の成るについても、出版社の中西啓二さんと後藤郁夫さんとにはいろいろお世話になった。ここに記して謝意をのべたい。

昭和四十三年四月二十九日

出口勇蔵

目　次

はしがき

Ⅰ　現代における経済学史……一

一　序……三

二　経済学の形成の二つの次元……八

三　経済学史の本質……一七

四　経済学史の類型……二七

五　経済学史の現段階……三九

六　二つの補論……六七

七　諸家の見解について……八〇

Ⅱ　社会科学における歴史研究について……一〇七

Ⅲ 方法論史研究の意義……一四一
——ハインリッヒ・ディーツェル批判——
Ⅳ 経済学の歴史的研究の意義……一七一
一 経済学が社会学の一部であることがどうしてわかってきたか……一七三
二 経済学の歴史的研究の意義……一八二
索引

I

現代における経済学史

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一　序

わが国では、経済学史の研究にたずさわる人のかずが他の国よりも異常に多く、その人たちだけで組織されている一つの学会をもっているくらいである。このことはわが国の経済学の特色をしめす、ひとつの目だった現象であり、この現象を手がかりにして、日本の経済学の批判を、つまりわれわれからいえば自己批判をおこなう道が一つしめされている、といってよい。そして自己批判にはいろいろな仕方がありうるが、総括的には、研究活動そのものにたいする反省という意味で、方法論上の検討となる、といってよい。ところで方法論は抽象談議であり、そのかぎりで、具体的な研究の内部に立入っての批判や検討とはことなっている。抽象談議であるだけに、具体的な研究活動をおこなっている人たちの、そのときどきの研究の具体的な内容にそくしての参考となるかどうかは、心もとないともいえる。けれども学史研究に異常なエネルギーがついやされていることとならんで、この種の抽象的な研究と称されるものも多いということが、わが国の経済学界の特色をしめし

ているのである。

こういう事態そのものを批判すべきだと、主張するひともいるだろう。けれども、第一に、方法論上の抽象談議がわが国に多いということは、客観的な事実であり、またこの種の議論を批判すべしという声もまた、実は、同様に抽象的な談議をもちかけていることにもなるのだから、批判することによって、実はこの種の研究の中に仲間入りしているのであり、上の客観的事実をさらにふやしていることにもなるわけである。経済学史と名のる研究書や教科書のはじめに方法談議をしないものは、わが国にはまれである。経済学史学会の第十回大会（昭和二十九年十一月、関西大学）において、経済学史方法論に関するシムポジュムが催されて、五人の報告者があったし、同じ学会の部会の研究会にもこの種の催しがおこなわれた。さらに最近になって、その成果にあき足らない人が、新らしく経済学史の研究といわれるべきものについて、方法論的な懐疑や積極的な主張の提示をおこなっている。(1)

学界のこんな気運に応じてか、昭和三十八年十一月の武蔵大学における学史学会大会において「経済学史研究の現代的意義」と題するシムポジュムがもよおされることになった。この催しによって、学界にわだかまっている、学史研究の意義にたいする見解の相違につ

いて、論点を整理し、ないしは少くとも、見解のわかれるところをつきとめて、学会会員の参考に資することが意図されたと、推察されるのであった。そして、シムポジゥムのその席で問題提出者としてえらばれたのが、小林昇教授とわたくしとであり、その席の司会者は末永茂喜教授であった。ところで、そのシムポジゥムには、八十人ばかりの会員が出席し、約二時間、討論がつづいたから、大会の催しとしては成功であったというほかはない。しかし、その結果、参加者諸氏の期待をうら切らない成果がみのったかどうかといえば、それはまた別個の問題であって、ひとによって意見はわかれることであろう。(2)

シムポジゥムにおいてわたくしがおこなった問題の提起は、時間の制限のために意をつくせなかったから、そして、学史学会の大会でこんな問題が比較的多数の会員の参加をよんだという事実を報告することは、われわれの学会に属していないわが国の経済学者、さらには外国の経済学者にたいしても、必要であると考えるから、その席での発言をおぎないつつ、わたくしの立場をここに明らかにしておきたいのである。遠慮のない批評が加えられることを望みたい。

さて、「経済学史研究の現代的意義」というのは、大会開催校から与えられたテーマで

あったから、このテーマの意味についての自分の見解をしめすことから、この叙述をはじめねばなるまい。

このテーマには二つの視角から光りがあてられるだろう。一つは、現代において、経済学史などという科目の研究がそもそも意味をもちうるのであるか、もちうるとすれば、それは研究対象をどのように定め、どういう関心をこめて研究がおこなわれることによって、期待されるものであるのか、という問い方であり（後述する宇野弘蔵教授の考えはこの問い方から出ていると思われる）、二つは、経済学史の研究の意義が一般的・抽象的には納得できているとしても（故杉本栄一教授、内田義彦教授、およびわたくしの考えなどがあげられる。これらについても後にふれる）、その意義に特に現代的という形容詞をつけることのできるようになるのは、どのように視点を定め、対象のどのような様相に注目してであるのか、という問い方となるだろう。これらの二様の問い方があっても、結局、このテーマは「経済学史の研究から現代的な意義のある成果がのぞみうるとしたら、その研究は、対象のどの範囲について、およびどんな方法を用いて、研究されるものなのか」というに帰着するだろう。

さて、わたくしは以前に、このテーマを一般的な形で答えて発表する機会を、三たびも

った。けれどもそれらの小篇においては力点が一面的であったり、概説風なかき方であったりして、専門学者の批判にたえるものではなかった。[3] ここでは、わたくしの考えを整えて全体として提示することをこころみ、専門研究者の批判を請うに足るものにしたいと思うのである。

（1）　経済学史研究のわが国でのしきたりにたいして疑義を提出したのは、平瀬巳之吉教授と豊崎稔教授とであろう。平瀬教授の見解は『経済学の古典と近代』（一九五四）の緒言に要約されており、豊崎教授の見解は『堀経夫博士記念論文集、古典派経済学の研究』（一九五六）への寄稿論文、「古典派の経済学者の研究方法」や京都大学経済学部創立四十周年記念『経済学論集』への寄稿論文、「現代資本主義論の必要」（一九五九）の中にみられる。経済学史学会の第十回大会（一九五四）における、方法論のシムポジウムに報告をおこなったのは、相沢秀一氏、林治一氏、渡辺輝雄氏、横山正彦氏、および島津亮二氏の五人であった。そののちに、このシムポジウムでの報告者の発言ないし平素の意見にたいする批判として提出されたと思える方々に、横山正彦氏、真實一男氏、末永茂喜氏、時永淑氏、中村賢一郎氏、和田重司氏などがある。これらの諸氏の意見は、後段にそれぞれところをえて紹介するとともに、それらにたいする私見をのべる機会をもつであろう。なお、豊崎教授の見解にたいする私見は『経済論叢』第七九巻第一号（一九五七年七月号）のなかでの私稿「堀経夫博士還暦記念論文集『古典派経済学の研究』をよんで」においてのべられている。

（2）　問題提出者の一人としてのわたくしのシンポジウムの成果にたいする感想をば率直にのべる機会が、ここにあたえられてもよかろうと思う。その催しは予定の時間を超過して、主催校の会員や事務職員の諸氏には多大の迷惑をかける結果になったのであるが、にもかかわらず、討論はつくされたわけでは決してなかった。むしろ肝心な点にはふれられることすらすくなかったといわねばならず、最後に、中村賢一郎会員と真實会

員とが提出者の立場に批判的な意見をよせられ、渡辺輝雄会員から総括的だが意味のある発言をされて、ようやくシムポジウムらしい恰好がついたというべきであった。わたくしがもった感想はつぎの二つである。

第一に、参加会員の発言には、問題提出者にたいする、および出席者にたいする質問という形のものが多くて、自説の積極的な提示がすくなかった。第二に、方法論的抽象的な地平での談議であってよいのに、具体的な研究内容にたちいらないことに不満を覚えた人たちがあったらしいこと。第一のことの結果は、問題提起者にたいする質問攻めのような恰好になって、討論の具体的な展開がはかどらなかった。発言者には「自説はふかく蔵する」という商業資本家的・封建的なモーラルがただよっているようであった。第二のことの結果は、方法論的な地平での成果としてみるべきものはなかったということである。

(3) 拙編『経済学史』(ミネルヴァ書房、一九五三年初版)第一章の拙稿、「経済学の歴史的研究の意義」(『経済論叢』第七五巻第四号、一九五五年四月)、および『社会科学入門』(みすず書房、一九五六年初版)の中の「経済学史」。最初のものにはわたくしの考えのあらましは出ているけれども、教科書として書かれているために、つっこみが足りない。だから後段にふれるように、専門学者の誤解を生むことにもなったのである。第二のものは、本書の最後の部分に収録されているが、新入学生を意識して執筆された論文であったために、序論に紙幅をとられ、その結果、本論をつくせないうちに筆をおかねばならなかった。第三のものも初学者むきに書いたのであって、そこでは、本稿の第三節に論じたことが中心にかかれている。

二　経済学の形成の二つの次元

経済学が学問として形づくられる過程を論理的に考えてみると、そこには二つの次元が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com